

## SCS を活用した日米合同授業

— 米国 William & Mary 大学で

裴 崢

コンピューターの時代に相応しく、SCS(大学間衛星通信ネットワーク)による遠隔合同授業の試みが活発になっている。私もSCSを語学の合同授業にどう利用するか、興味を持っていた。2年間の米国在外研修中、SCSによる語学の合同授業を見る機会に2回恵まれた。

これは私の研修先 The College of William & Mary (略W&M大)と金沢大学との間で行った授業で、この授業はアメリカ人学生が日本語で日本人学生とコミュニケーションすることを体験し、両国の学生に異文化を相互理解する機会を与えた。この授業はW&M大の現代言語文化学部日本語教育担当者と、金沢大日本語教育担当者とが協力して実行した。小樽商科大学の語学教育でも様々な様式で授業ができると考え、この2回行われた両校間のSCS合同授業の実情を伝え、合わせてこの授業の効果と方法について、私の見解と意見をも述べる。参加者は2回それぞれ違うが、同一教材を使ったので、2回の内容を併せて検討したい。

1回目は2001年2月16日、2回目は翌年2月21日だった。出席者は学生だけで、まず自己紹介をした。

1回目はW&M大は5人で、上級日本語クラス(4年間以上の日本語学習者)の学生で、女子4人、男子1人。2回目はW&M大はフレデリック<sup>1)</sup>さんという男子学生1人だった。彼はまだ大学2年生だが、中学2年の時に、日

---

<sup>1)</sup> 2回目W&M大側の参加者はフレデリックさん1人だったため、この以降も名前を使うことにする。

本人留学生のホストファミリーになったのがきっかけで、高校では日本語を学び、高校卒業後1カ月ほど日本旅行をした。金沢大の参加者は2回ともそれぞれ4人、男女2人ずつで、3、4年生だった。

進行しやすくするため、金沢大が「日本人の『YES』は『NO』!?」という文章を教材に選び、それを事前にW&M大に送った。当日は、金沢大の学生が議長を勤めて、教材に関する4つの主な話題を1時間ほど討論した。

## 1 はっきり「NO」と言えますか

日本人学生からはまず「日本語では断る時も、NOを言わないで、肯定的な表現を使いますが、アメリカでもそのような場合はありますか」との質問があった。

アメリカ人学生からは「はい、デートには行きたいのですが、宿題がたくさんあるので、今晚は行けません」という例を挙げた。日本人学生は、「こういう場合なら日本人も同じだ」とほっとしたようだ。「アメリカの会社では『YES』と『NO』をはっきり言った方がいいのですが、日本でも同じですか。友だちに『NO』をはっきりいえますか。『NO』の使い方は年齢や性別によって変わりますか」などについて、アメリカ人の女子学生が質問した。これに対して、日本人学生からは「親しい友達には『NO』を言いますが、会社では『NO』をできるだけ避けるような言い方をします。それに子どもの時は『NO』をはっきり言いますが、大人になったら、男性も女性も『NO』は控えめに使います」と答えた。その理由は、「みんなといい関係を作り、仲良くしていくために、『NO』ではなく、『YES, BUT, IF』を使うのです」と説明した。

2回目は、金沢大生が、日本人の「あいまい」な「YES」「NO」の場面を会話で演じて見せた。「日曜日に映画を見に行きませんか」という女子学生の誘いに、男子学生は「行きたいのですが、仕事があるかも」と言った。女子学生は「仕事の後はどうですか」とさらに誘った。男子学生は「ちょっと日程を調べてから電話をします」と答えた。これについては、フレデリックさん

も男子学生が女子学生の誘いに「NO」だと言っていることは理解できた。彼はアメリカ人ならパーティーに行きたくなければ、「いいえ、そのパーティーはつまらない」とはっきり断るのが普通だが、彼自身は「YES, BUT, IF」と日本人的に断ると言う。でもスポーツチームにいる人なら、チームの輪を壊さないため、婉曲に断ることは多いと説明した。金沢大の女子学生は「アメリカでははっきり断らないため、逆にチームの輪を壊してしまうことがないのですか」と心配した。フレデリックさんは「アメリカでは YES/NO の使い方ではあまり問題になりません」と答えた。

ここで金沢大の提案で、日本人女子学生はフレデリックさんを誘った。彼女は「今度の日曜日映画を見に行きませんか」と尋ねた。フレデリックさんは「大きな試験があるので、1日勉強しなければなりません。もし準備が終われば行きますが、多分終わらないでしょう。残念です」と答えた。この応答は、日本でも通用する、と日本人学生は確認した。彼女はさらに「すごくいい映画で、日曜日は最後の上映日だし、お勉強がはやく終わったら、行きませんか」と諦めなかった。これに対して、フレデリックさんも「今ちょっとスケジュールが分かりませんが、後で電話をします」と精一杯がんばった。彼は、自分の答えには本当にスケジュールが分からない可能性もあれば、「NO」の可能性もあると説明した。

この会話を英語でも演じてみた。フレデリックさんが「I was wondering if you can go to a movie in Saturday night?」と誘った。日本人学生は「I should go to a part-time job.」と肩すかしをくわせた。フレデリックさんは「You can take a holiday.」と勧めた。日本人学生は「I can't take a holiday.」と明らかな「NO」だった。「英語だと、日本人もこんなふうになる」と互いに笑っていた。

## 2 「残念」の意味

教材には日本の企業に製品を売り込む際、日本人担当者の応答が次のよう

に想定された。「なかなかすばらしい製品だと思いますが、デザインに少し問題がありますね。デザインがよければ考えられないこともないのですが、残念です。でも一応上司にも相談はしてみます。もし、OKになったら、連絡します」

1回目の授業では、議長は担当者のこの言葉から、購入の可能性の「NO」と「YES」のパーセンテージは、自分なら70%と30%に思うと話し、日米の学生の推定も聞いた。その結果、アメリカ人学生はそれぞれ、70%と30%、80%と20%、90%と10%、80%~90%と20%~10%、50%と50%、他の日本人学生3人は、1人はほとんど100%「NO」、1人は90%「NO」、10%「YES」、1人は90%「NO」、10%迷っているという結果だった。アメリカ人学生からは「NO」と「YES」を半々に思う人もいるに対して、日本人学生からは百パーセント「NO」、というまったく違う受け止め方が現れた。

2回目では、議長がフレデリックさんにマイクの購入を押し進める場面で即興で演じた。2人の会話は次のように展開された。

議長：「このマイクは非常に良い物ですので、ぜひ一本いかがでしょうか」

フレデリックさん：「いや、いま一つ持っているので」

議長：「でも今年はマイクの調子が非常によくなってきたので、声もよく通ります」

フレデリックさん：「ほしいけれど、今はお金がないです」

議長：「今ならお安くできます。フレデリックさんは今お金幾ら用意できますか」

フレデリックさん：「今私は五百円だけあります」

議長：「カードも使えますが、」

フレデリックさん：「私のカードは今月もう使い切れています」

議長：「じゃ、またよろしくお願いします」

「残念」を使わなかったフレデリックさんは、「もし自分がこのように断られたら、きっとすぐに諦めてしまいます」と、日本流のセールスマンに参ったようだ。「アメリカではこのような人はいい人と思われませんか」との質問に、

「よくない人と思われます」と率直だった。だから彼にとっては「日本では長い時間をかけ、一生懸命に売る人は評価されます」という議長の説明は意外だった。彼は、英語ならきつとこんなに長く付き合わず、「No, I am not interesting it, just go away.」というだけだろうと言った。

### 3 「すみません」の応用幅

「すみません」などを使う場面について、1回目の授業ではそのような状況をアメリカ人学生に英語で教えて貰った。米国人男子学生は、「誰かにぶつかったら、『Excuse me』、悪いことをしたら『I am sorry』を言います」と例を挙げた。女子学生は「Purdon me」、「Apologize for」の言葉を加え、「『Apologize for』は普通の会話に使いませんが、手紙や正式な場合に使います」、「悪いことをした時、『すみません』を言いますが、多くは言いません。多く言うと、誠意がないと思われますから」と説明した。

これに対して、金沢大生は、日本語だったら「Apologize for」はほとんど使わず、全部「すみません」ということにする。また「すみません」を多く言う方が誠意を感じ、態度がいいと受け止められる。たとえば事故の場合、「すみません」をたくさん言ったら、賠償額が減少される可能性もあると言った。

しかし2回目の会議では、金沢大生は「日本人はトラブルがある時、あまり喋りません。黙って謝りの気持ちを示します」と言い、フレデリックさんは「アメリカ人はあまり謝りません。僕は、それは悪いと思います」と批判的だった。

### 4 男らしさ、女らしさ

日米それぞれ思う男らしさ、女らしさの基準を紹介し合った。アメリカ人には強い人、スポーツの出来る人、文句を言わない人、問題があれば自分で

解決できる人は男らしい人で、女らしい人は美しい人だと思っているようだ。日本人は口数の少ない、言い訳をしない人は男らしい人で、料理ができ、子ども好きで、優しく美しい人は女らしいと思っているようだ。

日本人にとっての男らしいアメリカ人は誰かとの質問に、「ハリソン・フォード、アル・パチーノ」など俳優の名前が挙げられ、アメリカ人にとっての男らしい日本人は三船敏郎と言われた。「身近に思う男らしい人はいますか」との日本人男子学生の質問に対して、「小さいときから、体が大きくて、背が高くて、声が大きかった祖父が男らしい人だと思っていました」とアメリカ人男子学生が言った。それに対して、日本人学生は「日本人にとっては、体が大きいとか、声が大きいかは男らしさの基準とあまり考えていません」と反論した。「アメリカでは女らしいかどうかを考える時、料理が出来るかどうかは関係がないのですか」という日本人学生の質問に、「アメリカでは男も女も仕事をするので、女性にとって料理が出来るかどうかは大切なことではありません」と女子学生が答えた。男子学生は「家では母も仕事をしているので、父はいつも料理をしています。父は料理が大好きです。ぼくも好きです」と具体的に答えた。

2回目の授業では、先の「すみません」の問題と一緒に議論したので、「アメリカ人は自分が悪いことをした時に、謝らないのですか」との質問に、フレデリックさんは「謝りません。男らしい人はいつも正しいことをすると思えますから」と言った。「家では奥さんに謝りますか」と追求されると、「家では男はいつも謝っています。ワイフは怖いからです」と笑った。

この2回のSCSによる合同授業では、参加者が違っても、ともに同じ教材が使われた。にもかかわらず、工夫の仕方によって、それぞれ味のある授業ができたので、私には新鮮で、よい勉強になった。1回目はアンケートなどで言葉や文化に対する理解の相違を確認し、アメリカ人学生から質問を多く引き出すことで討論を深め、相互理解を図った。2回目は4対1の難しい状況なのに、場面の実際演出、英語応答との比較、また今度は金沢大生の積極

的な「攻め」によって、少人数にかかわらず、多くの交流が実ったと思う。

教材も日本文化の特徴がよく表現されているものを選んだため、討論が容易だったし、面白かった。終始和やかな雰囲気、これだけ内容の濃いコミュニケーションができたのもW&M大生の日本語力を物語っていると思う。

この授業を通して、お互いに次のような認識を明らかにしたと私は思う。まず丁寧な断り方をすれば、相手を傷つけないということは日本人もアメリカ人も心得ている。ただし、日本人はアメリカ人よりもっと気遣う姿勢を取る。また日本語に現れている「曖昧」、膨らみへの理解、類似の多い表現から本当の意味を持つ語句への発見は、日本語学習上の難点だとも分かった。

たとえば、商品の売り込みを受け入れる日本企業の「NO」と「YES」の結果を推測する時、日本人学生は「残念です」という言葉に「NO」のほぼ確定した結果が読み取れると説明した。私も「残念」は断るという意志を表明したと思い、「YES」をほとんど期待できないと理解している。アメリカ人学生が半々だと思った理由に触れなかったが、「少し……けれども……相談」などの言葉から「YES」を期待したのではないかと考えられる。それらは確かに肯定的な機能を持つ言葉だが、ここではまったく肯定を意味しない言葉だと考えていい。「残念」は行動の結果に対する心情的な言葉なので、この会話の中で重要な意味を伝えていた。アメリカ人学生は「残念」が意味した「I am sorry」が分からなかったので、「YES」を日本人より大きく期待したと思う。「日本人ははっきりと『NO』を言うことが苦手だ」というよりも、むしろ「NO」をはっきり言わないことが日本人としては当たり前なのだ。

このようにして日米文化の違いを互いに表現によって確認し、理解を深めただけでなく、会話や討論にさり気なく使われた例からも、日米人の違いの一端に気づいたのではないかと思う。パーティー好きなアメリカ人学生はすぐパーティーに誘う例を持ち出すのに、日本人学生は映画に誘った。その誘いを断る理由にしても、アメリカ人学生は2回とも「宿題が多い」、「試験がある」だった。W&M大で学生は実にいつも宿題やクイズ、単元テストなどに追われる状態だった。それに対して、「アルバイトがあるから」という日

本人学生の「NO」のも真実だった。自分たちのコミュニケーションからそれぞれの生活の違いが表現に反映したところを思い知らされていた。

授業は臨場感に溢れ、学生間のやり取りは緊張感を持ち、生き生きしていた。国境を越えた日米学生同士の討論を行う授業として、学生の知的好奇心と意欲を大きく引き出し、双方ともコミュニケーションの意義と効果を身近に体験し、異文化に親しんだ。アメリカ人学生にとっては、日本語による意思疎通に成功した達成感を味わうことができた。これは大きな意味を持ち、授業や教育方法を多様に改善することができよう。授業の進行等を同時に録画ができるため、授業を振り返ることによって、問題点を見つけ、教授・学習の両面から改善する工夫や留意点の発見にも役に立つ。

これらの改善や効果を身近なものとするためには、様々な努力が必要だ。双方向性の高い授業なので、議長の役割は重大で、参加者の発言を促し、進行の調整を図らなければならない。私が見たこの2回とも学生が議長を務めていたが、実際この合同授業を実施する前に、授業の立案や計画などについて、教官間で緊密な連絡が取られていたようだ。従ってテーマの予備知識、問題意識、討論の展開などに分けて、綿密な準備が必要だった。学習者間の習得言語による討論や交流なのだが、教師としての働きをどのように実現するかについても、十分な検討が必要だ。またSCS機器の操作については、トラブルの回避などの問題で、授業の円滑な進行を保障するため、機器操作を専門の担当者に任せの方がよい(W&M大では2回ともそうだった)。

SCSによる鮮明な画像、音声の同時送受信は、教室、大学、国の壁を超えて学習者に新鮮な刺激を与えて、異文化交流の場をもたらずに違いない。この「新兵器」を活用して、教授・学習機会の拡大や教授・学習活動の活性化を促し、教育改善に役立てたい。